

明海大学 不動産学部

不動産の不思議

第100回

学生たちの視点と発見

【学生の目】

8月27日から3日間、「不動産の不思議」の執筆仲間と裏磐梯のキャンプ場で自炊生活の合宿をした。自然の中で不動産と不動産学の原点を考え、共同生活を通じて不動産と人間の関係を探るためだ。キャンプ場は福島県耶麻郡北塩原村小野川湖畔にあり、静かな湖と山々の緑に囲まれた、別世界だった。

小野川湖のほか裏磐梯の湖沼は1888年の磐梯山の水蒸気爆発によって川がせき止められたもので、100年かけて回復した自然がある。



森田 愛理
不動産学部4年

不動産学の原点は「自然と人」

磐梯朝日国立公園の中心で、多様な自然環境に恵まれ、多くの動植物が生息する。

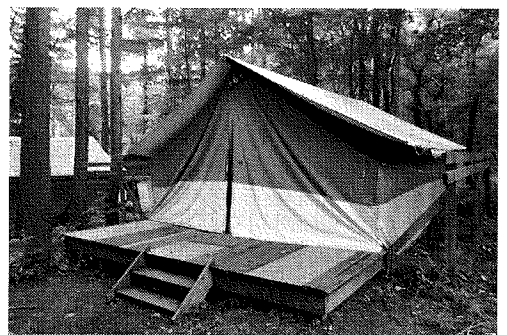
キャンプ場は炊飯食事用のダイニング棟を中心にトイレ棟、シャワー棟や管理棟があり、宿泊用キャビンが配置される。ダイニング棟は、束石を置いて束を建て、大引きと根太を組んで床を張り、柱を立てる。大

学で学んだ古い木造家屋の造り方と同じだが、屋根は母屋の上に布を張る。開口部も布を開閉する。キャビンは更に原始的だ。床組みまではダイニング棟と同じだが、上部は布製だ(写真)。2段ベッドが入る大きさだが、これは建築物か。第一の感動だ。

裏磐梯の自炊合宿に学ぶ

第二の感動は造り方だ。大引きまでは大工に頼むが、上部はキャンプ場の主催者とボランティアが協力して造る。湿度が高くキャビンは5年程度で更新する。ここを利用したい。だから手作りする。不動産の原点だ。

第三の感動は環境共生の仕組みだ。給水は綺麗な湧き水を山中から引き、名水が存分に利用できる。排水は自立した場所、数カ所に分けてバクテリアを使って浄化し、水分を蒸発散、拡散浸透させる。



執筆仲間と訪れたキャンプ場のキャビン

第四の感動はメンテナンスだ。屋根近くまで雪が積もる地域で、11月初旬には雪でダイニングやキャビンが倒壊しないよう屋根のテントを撤収して閉鎖し、翌年の5月初旬に設営する。設営の際は前年の課題を少しずつ改善して新たな要素を盛り込む。水質改善や汚水処理はそうして現在の姿になった。漸進は不動産経営の原点だ。

【教員のコメント】

不動産学は「自然、土地、建物、人」が密接に関わる学問である。「不動産の不思議」の連載100回に際し、不動産学の原点について考えた。実学としての不動産学をより深く理解するために現地調査を通しては最も有効使用にほかならない。

て体で学び、座学だけでは知ることのできない事柄を発見、吸収していきたい。併せて、不動産実務家の卵として、不動産学部生の声をこれからも届けていきたい。